

## 第二百四十話 敵前逃亡の誇りを甘受するか？

トップの極限における責任とは何だろうか？ 敵前逃亡と誇られようが生き残ることか、それとも、城を枕に部下将兵と生死を共にすることか？ それを考えさせる好個の事例。

### 1 比のバターン半島及びコレヒドール要塞攻略推移

日米英蘭戦開戦当初の南方作戦は、12月8日未明のマレー半島上陸作戦と同日午後比島攻略作戦で開始された。比島攻略は、陸・海軍航空部隊によるルソン島に対する航空攻撃次いで陸軍部隊をルソン島北部に上陸、攻略軍主力たる第14軍を22日にリングエン湾に上陸させた。

上陸した14軍は、マニラに向け進攻した。米極東軍司令官マッカーサー將軍は、マニラ湾を挟むマニラと向かい側のバターン半島とコレヒドール島に立てこもる決断をし、マーシャル参謀総長の許可を得ていた。12月23日、マッカーサーは、隷下の各部隊長に方針を伝達し、米極東軍司令部と比政府もバターン半島への移動を開始した。

12月26日午後、日本海軍はフィリピン作戦の大部を終え、主力は次の蘭印作戦に移行した。14軍は、1942/1/2にマニラを占領した。日本軍は、バターン半島へ向けて多数の米・比軍が移動しつつあることは確認していたが、所詮は敗残兵で、兵力は40,000ないし45,000程度と見積もっていた。バターン半島を軽視すべきでないという異論もあったものの、南方軍は第48師団と第5飛行集団の大部分に蘭印・ビルマ方面への転進を命じ、バターン半島の攻略には、大本営と南方軍は、歩兵1個連隊と、二線級部隊の旅団とを差し向ければ十分との判断であった。

然しながら、日本軍は手古摺ったのだ。第一次及び第二次のバターン半島攻略戦を行った結果、漸く4月9日キング少将が降伏を申し入れてきた。捕虜は7万以上であった。

引き続き、コレヒドール要塞を攻略(4/14~5/7)し、マッカーサーの後任のウエイライト中将が日本軍の降伏要求を受諾した。マッカーサーはこれに先立つ、3月12日、マッカーサーと家族や幕僚達は魚雷艇でコレヒドール島を脱出、ミンダナオ島に到達してB-17でオーストラリアへ飛び立っていた。(厳密には幕僚の脱出は命令違反である由。)

### 2 若干の観察

#### (1) 第一次バターン作戦失敗と事後の厳しい戦いを強いられた主たる原因

日本軍はバターン半島の米比軍を敗残兵と見做したので、攻撃兵力、攻撃準備も不十分であった。この攻撃失敗の責めを負うて、軍参謀長前田中将は更迭され、軍司令官も後に予備役に編入された。

米比軍の行動は予定通りの行動であり、前田中将は、米西戦争の例を指摘して、寧ろバターン退避の可能性を進言していたという。大本営や南方軍には責任はなかったのか？ 敗残兵と簡単に決めつける危険性を誰も懸念しなかったのか。日本軍は敵を侮ったか。海軍の艦艇や航空機の支援は期待できずに厳しい戦いを強いられた。

#### (2) いくら大統領命令があったとはいえ、部下将兵を置き去りにする神経は理解不能

武士道的矜持を有する日本人にはマッカーサーの敵前逃亡は理解不能だ。「I shall Return」個人的な思い入れからフィリピン攻略を優先させたとの感が強い。

同様の事案は、国民政府軍にもあった。南京攻略作戦(1941/11/7~12/7)で、蒋介石夫妻、ドイツ軍事顧問団、南京市長ら政府高官も全て南京を脱出した。為に、無政府状態となり市民は混乱状態に陥った。

#### (3) 所謂バターン死の行進について

米比軍捕虜を捕虜収容所に移送する際、当初計画と異なり、徒歩により約80kmを3日間、1日平均14kmを移動させた。この間の米比軍捕虜死亡数は1.8万人である。

(メモランダム第26話参照)

(了)

